

『神の恵みの管理者として』(ペテロの手紙第一 4章 7-11節) 2022.6.19.
<はじめに> 「万物の終わりが近づきました」(7)とあります。「終わり」に向かって時は流れ進む、というのが聖書の歴史観です。「終わり」とは何でしょう。悲惨な終焉、もしくはすべてが報われる幸いな時でしょうか。それに向き合う私たちはどうすればよいのでしょうか。

I その時に向き合う

① 祈りのために(7)

時が迫っている、と聞くと心が騒ぎ立ち、何とかしなければ、何かをしなければ、と動き回りたいくなりがちです。時を司り、時機を示されるのは神なる主で、私たちの救い主です(詩 31:15)。ですから、私たちは神に心に向けて祈り、その御意と計画に思いを向けましょう。

② 心を整え身を慎み(7)

私たちの取り組みや努力をもってしても、終わりが来ることは避けられないとなれば、自暴自棄に走る人もあるでしょう。しかし、終わりの時は「イエス・キリストが現れるとき」(1:7)で、私たちを救うために来られます。その期待があるから、心を整え身を慎むのです。

II 具体的な3つの取り組み

① 互いに愛し合いなさい(8)

自分の目に適うから愛する、以上の愛です。それは「多くの罪をおお」のです。相手の罪を隠したり、否定するのではなく、それをおおい尽くし、赦し受け入れる愛です。それを先ずイエス・キリストが私に示してくださいました。主がされたように私たちも愛するのです。

② 互いにもてなし合いなさい(9)

自分の持っているもので相手を喜ばせようとする心遣いです。強いられたり、義務感からだど難しく、不平がこぼれます。しかし、真に心から愛し敬う相手ならば、自ずから熱心に取り組み、心づくしのもてなしをすることに自分も喜びを感じます。

③ 互いに仕え合いなさい(10-11)

もてなす手段・方法は人それぞれです。そのために神は一人ひとりに賜物を分け与えておられます。良し悪しや優劣を競うのではなく、お互いが補い合い、組み合わせられることで、全体としてより充実できます。キリストのからだとして各部分が働くのです(エペソ 4:16)。

III 神の恵みの管理者として

① 自分が受けているものを知る(11)

神から受けた賜物に無知・無自覚だと、賜物など何もない、と思うのでしょうか。語る、奉仕する(11)はその一例で、賜物は多岐にあります。本人より他人が気づいていることもあります。診断テストを受けると、より具体的に見えてきます。

② 神にふさわしく(11)

賜物は神と人に仕えるために神が与えてくださったものです。それをどう用いるかは管理する私たちに問われています。賜物を与えられた神の御心とご計画に沿って用いれば用いるほど、周囲を喜ばせ、神はその賜物をいよいよ豊かにしてくださいます。

<おわりに> 神は終わりの時に私たちを通して豊かな収穫を見たいと願っておられます。そのために私たちも与えられた愛と賜物を存分に用いて、キリストの栄光と力が現れ、神があがめられることを期待しましょう。(H.M.)